編　修　趣　意　書
（教育基本法との対照表）

※受理番号	学　校	教　科	種　目	学　年
28-93	高等学校	公民科	倫理	

※発行者の番号・略称	※教科書の記号・番号	※教　科　書　名
104 数研	倫理 314	改訂版　倫理

１．編修の基本方針

（1）教育基本法や学習指導要領における目標が達成されるよう，学習指導要領の内容や，その取扱いに示された事項に準じて編修した。

（2）自己や他者に対する関心を深めて学習意欲を高め，先哲の基本的な考え方を手掛かりとして，現代の倫理的課題に取り組めるようになることに留意して編修した。

（3）現代に生きる自己と現代の倫理的諸課題，さらに先哲の考え方に関する基本的な学習をとおして，人間としての在り方生き方についてみずから考える力を養えるようにし，また社会に対して主体的に寄与しようとする態度を育成できるように配慮した。

（4）本文の記述にあたっては，学習内容を正確に理解できるよう，できるかぎり平易に，かつ簡潔になるよう配慮した。

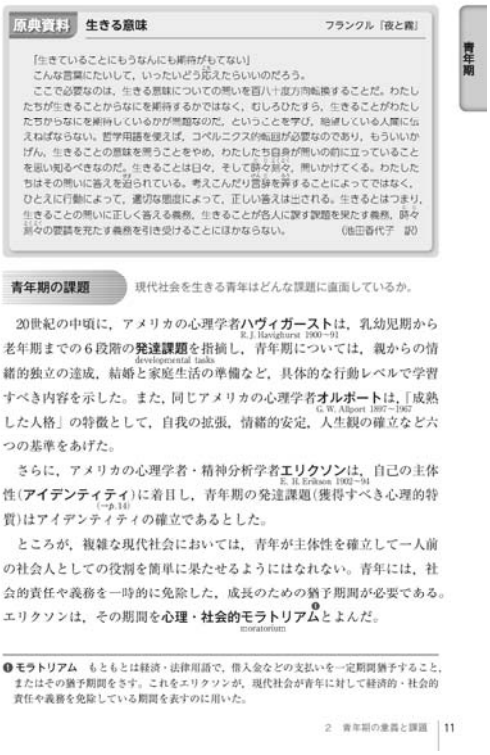
２．対照表

図書の構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所
第1編 現代に生きる自己の課題	青年期の持つ意義や自己形成の課題について考えさせるとともに，将来の職業と生活を視野に入れながら青年としての生き方について自覚させるように展開した（第２号）。	5～20ページ
第2編 人間としての自覚	世界三大宗教を含む西洋と東洋の源流思想を紹介し，そこでの思索が現代の知識・教養や真理を求める態度にもつながっていることを気付かせるよう配慮した（第１号）。	21～70ページ
第3編 現代に生きる人間の倫理	自然・人間・理性・個人・民主社会などにかかわる西洋近現代思想を中心に紹介し，倫理的な見方や考え方を身につけることができるよう配慮した（第２号）。	71～134ページ
第4編 国際社会に生きる日本人としての自覚	日本の風土や伝統思想，さらには先人の思索を紹介し，生徒自身の価値観や生き方に与えている影響について気付かせるよう配慮した。（第5号）。	135～188ページ
第5編　現代の諸課題と倫理 第1節 生命倫理（バイオエシックス）	生命科学やバイオテクノロジーの発展にともない提起されてきたさまざまな問題について，多様な角度から考察できるような構成にした（第４号）。	190～195ページ

第5編　現代の諸課題と倫理 第2節 現代の環境問題	自然の生態系が持つ特徴や人類の活動が自然に与える影響を知り，地球規模で環境保全に取り組んでいかなければならないことを気付かせるような構成にした（第４号）。	196～201ページ
第5編　現代の諸課題と倫理 第3節 家族と地域社会 第4節 情報社会の功罪	家族や地域社会など，生徒に身近な題材を通して，それぞれの構成員の役割や公共性の意義に気付かせるよう配慮した。また，情報社会における他者とのかかわりについても考察できるような構成にした（第３号）。	202～211ページ
第5編　現代の諸課題と倫理 第5節 さまざまな文化・宗教への理解 第6節 国際平和と人類の福祉	自国の伝統・文化を尊重することが，自民族中心主義に陥ることのないように注意を喚起し，他国や異文化の尊重を国際平和へと結び付けられるよう配慮した。（第５号）。	212～220ページ

３．上記の記載事項以外に特に意を用いた点や特色

（1）この科目の導入である第１編では，青年期の意義や課題を学べるようにするとともに，編末のコラムにおいて，先哲の基本的な考え方を紹介する第２編～第４編，さらには，現代の倫理的諸課題を考察する第５編へのつながりを示唆するような記述を心掛けた。



原典資料　生きる意味　　フランクル『夜と霧』

「生きていることにもうなんにも期待がもてない」
こんな言葉にたいして，いったいどう応えたらいいのだろう。
ここで必要なのは，生きる意味についての問いを百八十度方向転換することだ。わたしたちが生きることからなにを期待するかではなく，むしろひたすら，生きることがわたしたちからなにを期待しているのかが問題なのだ，ということを学び，絶望している人間に伝えねばならない。哲学用語を使えば，コペルニクス的転回が必要なのであり，もういいかげん，生きることの意味を問うことをやめ，わたしたち自身が問いの前に立っていることを思い知るべきなのだ。生きることは日々，そして時々刻々，問いかけてくる。わたしたちはその問いに答えを迫られている。考えこんだり言辞を弄することによってではなく，ひとえに行動によって，適切な態度によって，正しい答えは出される。生きるとはつまり，生きることの問いに正しく答える義務，生きることが各人に課す課題を果たす義務，時々刻々の要請を充たす義務を引き受けることにほかならない。　（池田香代子　訳）

青年期の課題　現代社会を生きる青年はどんな課題に直面しているか。

20世紀の中頃に，アメリカの心理学者**ハヴィガースト**（R.J. Havighurst 1900～91）は，乳幼児期から老年期までの６段階の**発達課題**（developmental tasks）を指摘し，青年期については，親からの情緒的独立の達成，結婚と家庭生活の準備など，具体的な行動レベルで学習すべき内容を示した。また，同じアメリカの心理学者**オルポート**（G.W. Allport 1897～1967）は，「成熟した人格」の特徴として，自我の拡張，情緒的安定，人生観の確立など六つの基準をあげた。

さらに，アメリカの心理学者・精神分析学者**エリクソン**（E.H. Erikson 1902～94）は，自己の主体性（**アイデンティティ**）（→p.14）に着目し，青年期の発達課題（獲得すべき心理的特質）はアイデンティティの確立であるとした。

ところが，複雑な現代社会においては，青年が主体性を確立して一人前の社会人としての役割を簡単に果たせるようにはなれない。青年には，社会的責任や義務を一時的に免除した，成長のための猶予期間が必要である。エリクソンは，その期間を**心理・社会的モラトリアム**❶とよんだ。（moratorium）

❶**モラトリアム**　もともとは経済・法律用語で，借入金などの支払いを一定期間猶予すること，またはその猶予期間を指す。これをエリクソンが，現代社会が青年に対して経済的・社会的責任や義務を免除している期間を表すのに用いた。

2　青年期の意義と課題　11

COLUMN「自分探し」の落とし穴

現代の青年と「自分探し」

「本当の自分」，「自分らしい自分」，「自分への気づき」，「わかってもらえる自分」など，自分の内面に意識を強く向けたことばが，日本の若者のなかで頻繁に使われている。これらのなかでも代表的なものは，何といっても，「自分探し」である。

大枠においていえば，「自分探し」をはじめ，これらのことばには，「自己実現」の前提条件となる一種の「自己理解」の欲求が込められている。その意味では，「自分探し」の欲求は，自我の自覚とともに，思考力の発達する青年期に高まって当然である。

しかし，その際に，内的な「自分探し」の欲求が，十分な知識とリアルな体験を欠いた状態で個人のなかで増幅されるなら，現代の青年たちは答えを見いだせずに，ただ五里霧中の状況に陥ってストレスをためるだけである。それどころか，ときには肥大化した未熟な自我（わがままな欲望）によって，身勝手な虚構の世界が個人の心のなかに作られてしまう。

その結果，現実の生活や社会に対する規範意識の低下とともに，反社会的な行動も起こしかねないのである。

先哲の英知を手がかりに

そうしたことを防ぐには，他者との積極的なかかわりをはじめ，現実の生活や社会の多様な体験とともに，霧中を照らす光源が必要不可欠となる。時代や社会を超えて光源となりえるものが，これから見ていく，先哲（昔のすぐれた思想家）の倫理や思想である。

そこには，その時代の苦難のなかで見いだされた人類の英知が豊かに含まれている。その英知を光源として活用することによって，外的な世界だけではなく，自分の内的な世界，さらには自分とその両世界との位置関係を確認することができる。

そのような照射があってこそ，外的な世界の探求と内的な世界の探求とが個人のなかで調和的に健全な形で統合される。それによって，外的な世界における自分の立ち位置や役割とともに，それにかかわった自分の個性や在り方，生き方，すなわち，現実の社会とつながった「自己理解」と「自己実現」が自覚され始めるであろう。つまり，傲慢な自己肯定感ではない，社会や他者，そして自分自身のためにもなるような「生きがい」が自覚される。そのような自覚へと導かれた健全な若者が，成長して現実の社会に多く参画するようにならなければ，持続可能な社会の構築は，とても実現されえない。

20　第1編　COLUMN

（2）第２編～第４編においては，世界三大宗教を含む源流思想から西洋近現代思想，さらには日本思想を取り上げ，様々な先哲の哲学・思想，倫理観・道徳観を紹介した。

1. 第２編においては，現代の哲学的な考え方，宗教的な考え方の源流となる思想を紹介し，人間としてのあり方生き方についての自覚を育てられるようにした。
2. 第３編においては，現代の民主的な国家・社会の形成へと直接つながる思想を中心に紹介し，公民としての資質を養えるようにした。
3. 第４編においては，国際社会に生きる現代の日本人に受け継がれてきた伝統や文化，また，代表的な日本の先哲の思想を紹介し，我が国と郷土を愛する心を育てられるようにした。また，編末では図解を用いて，現代日本の思想・文化が様々な外来思想を受容しながら形成されてきたことに気付かせ，他国や異文化を尊重する態度を養えるように工夫した。

←第2編

第1節 古代ギリシアの思想

1 哲学の誕生…神話から哲学へ

神話（ミュトス）からロゴスへ　哲学はどのようにして始まったか。

この世界はどのようにして成り立っているのか。そのなかで人間はどう生きていけばよいのか。人間はど…とめていくべきなのか。ものごと…はこのような問いに突き当たる。…いを繰り返し追求してきた。そして…りあげてきた。とくに古代ギリシ…

▲1 ミロのビーナス（フランス・ルーブル美術館蔵）　1820年にメロス（ミロ）島で発見。大理石で作られたギリシア神話の女神像。

22 | 第2編・第1章　西洋思想の源流

←第3編

第1節 理性への信頼と人間の尊厳

1 ルネサンス

中世から近代へ　近代において，人間の本質はどこに見いだされたか。

西洋に近代のあけぼのをつげた二つの運動，**ルネサンス**と**宗教改革**が，14～16世紀にかけて，ほぼ時を同じくして起こっ…動は，古代ギリシア・ローマや原始キリスト教と…に立ち返ることによって，精神と文化を復興・再…互いに似ていた。また，人間の「個」の意識の覚…点でも共通していた。そして，何よりもこの「個…近代へと歴史を転回させるターニング=ポイント。

ローマ=カトリック教会のもとで，キリスト教に…を迎えた。そこでは，人間も事物も神との関係に…られ，すべて神の定めた不動の秩序のもとにあっ…間は，神の恩寵（恵み）を授けられた「被造物」と考えられていた。人間の本質は，神の側から見られていたのである。

これに対して，中世も終わりに近づいた14世紀，イタリアに起こったルネサンスの時代に入ると，人間の本質は人間自身に備わる能力の側に見いだされるようになる。そこに西洋の近代が始まった。

人文主義者：ダンテ，ペトラル…，ボッカチ…，ピコ=デラ…，ミラン…，エラスム…，マキャヴ…，トマス=モ…

芸術家：ボッティ…，レオナル…ダ=ヴィ…，ミケラン…，ラファエ…

▲1 ルネサン…主な活躍時期

↓第4編

第1節 日本の風土と古代日本人の考え方

1 日本の風土と社会

自然環境　我が国の自然環境について考えてみよう。

我が国は，南北に伸びた島々からなり，亜熱帯から温帯・亜寒帯まで気候の差は大きいが，大部分が**温帯モンスーン気候**に属している。夏と冬の季節風は，それぞれ太平洋側と日本海側に豊富な降水をもたらす。豊富な水と夏の高温は，適度に植物を育成し，人々は動植物など山の恵みを享受してきた。四方を海に囲まれているため，海の幸も豊富である。

しかし，自然は人々の思い通りにはならない。しかも，時に，天候不順，暴風雨，雪害，干ばつなどの自然災害をもたらす。川は短く急流で，大雨のときは土砂崩れや氾濫・洪水が起こりやすい。火山地帯が多く，噴火・地震などによる深刻な災害もしばしば起こる。

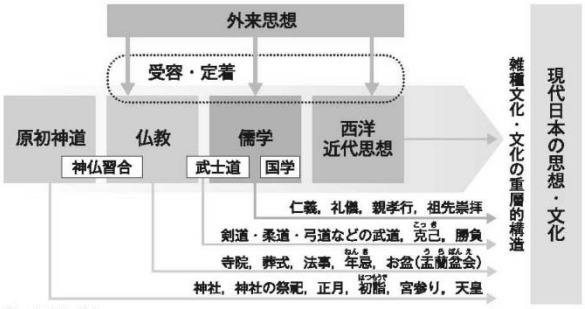
自然は，豊かな恵みとともに深刻な災害をもたらすという二面性を持つ。科学が発達した現在でも，完全には予測不能であり思い通りにはならない。古代以来，我が国の人々は，そのような，二面的で，思い通りにならない自然の威力を**神**とみなしてきた。

崇り神と生み出す神　人々にとって神とは何であったか。

古代の人々は，自然災害などの災厄（わざわい）を，神の「**崇り**」とみなした。「崇り」とは，もともと神の「たちあらわれ」を意味していたとされている。つまり，災厄は，神が人々の身近に出現することだったのである。神は，人々の想像を超えた働きを持つ，恐るべき**崇り神**であった。

しかし，災厄をもたらす神の威力は，同時に，水や風や太陽などが植物

136 | 第4編・第1章　日本の伝統思想と東洋思想の受容



▲日本思想の流れ

（3）第５編においては，生命・環境など現代の倫理的諸課題を紹介するとともに，各節末にはそれぞれの課題についての「論点」を提示して，第４編までに学んだ先哲の基本的な考え方を活用しながら現代の社会について主体的に考察できるように配慮した。

第2節　現代の環境問題

環境問題の発生　環境問題とはどのような問題であり，どのようにして生まれてきたものなのだろうか。

人間は自然に働きかけ，そこから食料や資源・エネルギーを得ることで生きている。このとき，人間の活動には，自然を破壊し汚染する危険性が常に付きまとっているのである。

自然の破壊と汚染が日本社会で初めて大きな問題となったのは，1880年代に発生した**足尾銅山鉱毒事件**であり，日本公害問題の原点といわれている。栃木県選出の衆議院議員である**田中正造**（1841～1913）は，生涯をかけてこの問題に取り組んだ。

さらに，それ以上に深刻な被害をもたらしたものが，1960年代を中心とした熊本および新潟の水俣病，三重の四日市ぜんそく，富山のイタイイタイ病である。その被害訴訟は**四大公害裁判**といわれ，公害を生み出した企業の責任が問われた。

これらの公害事件に共通するのは，企業が経済効率を優先するあまり環境の悪化に配慮せず，人々の生活や生命を軽視してきたという点，および国民の生命と幸福を守るべき国家が，その侵害に対して有効な対策をとらなかったという点である。

原典資料　**公害と近代産業**
石牟礼道子『苦海浄土』

水俣病事件もイタイイタイ病も，谷中村（足尾銅山鉱毒被害の村）滅亡後の七十年を深い潜在期間として現われるのである。新潟水俣病も含めて，これら産業公害が辺境の村落を頂点として発生したことは，わが資本主義近代産業が，体質的に下層階級侮蔑と共同体破壊を深化させてきたことをさし示す。その集約的表現である水俣病の症状をわれわれは直視しなければならない。

このように，日本社会に深刻な公害問題が発生しているころ，地球規模で進みつつある環境破壊・汚染に警告を発する人々が現れた。アメリカの経済学者ボールディング（K. Boulding 1910～93）は「**宇宙船地球号**」ということばによって，地球は閉ざされた環境であり，その破壊と汚染は人類にとって致命的であると警告した。また，海洋生物学者**カーソン**（R. Carson 1907～64）は，著書『**沈黙の春**』（1962年）において，農薬が生態系を破壊する危険性について語っていたのである。

参考　**MOTTAINAI**　農林水産省の統計によると，食用に向けられる食品資源のうち，まだ食べられるのに廃棄されているもの（食品ロス）は，500～800万トン，割合にして全食用食品の６～10％もあるという（2011年）。一方，国連食糧農業機関（FAO）によれば，世界の慢性的飢餓人口は８億人以上に上るとされている。国際社会の努力もあり，世界の飢餓人口は減りつつあるが，今なお９人に１人が飢えに苦しんでいる。

こうした現状のなか，2005年，国連を舞台に「MOTTAINAI」運動が巻き起こった。その主唱者は，ノーベル平和賞受賞者でケニアのナイロビ大学教授の**ワンガリ＝マータイ**（W. Maathai 1940～2011）である。彼女は，京都議定書関連の会議で来日した際，「もったいない」という日本語を知り，これを環境問題を考えるキーワードとして取り上げたのである。このことばには，リデュース（廃棄物の発生抑制）・リユース（再使用）・リサイクル（再利用）の3Rとともに，地球環境あるいは地球資源に対するリスペクト（尊敬）が込められているという。日本語由来の「MOTTAINAI」について，われわれ自身がもう一度考えてみる必要がある。

マータイ

環境問題の論点　意見を比べて考えてみよう

①世代間倫理

意見A　生存権は現在の世代の人々だけではなく，将来の世代の人々にも保証されるべき権利であり，そのための環境の保護は現在世代の義務である。

意見B　権利は義務と相関関係にあり，現在の人々や社会に対して義務を負うことのできない将来の世代には権利はない。

②環境南北問題

意見A　現在，進行しつつある地球環境の悪化は，発展途上国の工業化による大気汚染や極めて貧しい国の過剰な放牧・焼き畑などが原因である。

意見B　地球環境の破壊・汚染は，これまでの先進国の工業化や，今も続く資源・エネルギーの過剰な消費が原因である。

③生物の保護

意見A　人間だけでなく動物にも生命があり，痛みや苦しみもあるのだから，動物の生存権も認めるべきである。

意見B　権利と一体化した観念である義務を負えない動物に生存権を認めるのは間違っており，あくまでも人間の生存権が優先されなければならない。

現代の諸課題

編　修　趣　意　書
（学習指導要領との対照表，配当授業時数表）

※受理番号	学　校	教　科	種　目	学　年
28-93	高等学校	公民科	倫理	

※発行者の番号・略称	※教科書の記号・番号	※教　科　書　名
104 数研	倫理 314	改訂版　倫理

１．編修上特に意を用いた点や特色

（1）学習指導要領にあげられた項目に基づき，本文の内容を編・章・節に分けた。節内には小見出しをつけて，学習内容がはっきりわかるようにした。また，必要に応じてコラムや副文（比較・補足・参考），脚注を設け，生徒の知識を深めたり，興味を広げたりすることができるようにした。

比較　他の事項との関連や同じ性格の事項について，事項間の類似点や相違点を整理・理解するための解説として設けた。

比較　**鎌倉新仏教**　法然・親鸞・一遍・道元・日蓮たちの教えは，天台宗・真言宗・華厳宗などの旧仏教に対して，一般に**鎌倉新仏教**とよばれている。彼らは，共通して，在来の仏教の教えを受け継ぎつつ思索を深め，念仏・坐禅・唱題など，誰でもが可能な易行を説いた。また，親しみやすい和文を用いることによって，仏教の核心を平易に説いた。彼らによって，仏教はあらゆる階層に広まることになった。なお，彼らの教えは，主に室町時代に広まった。浄土真宗では，**蓮如**(1415～99)が，御文(御文章)とよばれる手紙で，親鸞の教えをわかりやすく説いて各地で布教につとめ，本願寺教団を発展させた。

一方，鎌倉時代には，旧仏教でも改革運動が興った。戒律を重んじ密教も修行した真言律宗の叡尊や忍性は，病人の救済や橋の修造などの社会事業を行った。また，華厳宗を復興した明恵は，法然の専修念仏を批判し『摧邪輪』を著した。

	宗　派	開祖(出身)	主要著書	関係寺院
念仏	浄土宗	法然(美作)	選択本願念仏集	知恩院(京都)
	浄土真宗(一向宗)	親鸞(京都)	教行信証	本願寺(京都)
	時宗	一遍(伊予)	一遍上人語録*	清浄光寺(神奈川)
唱題	日蓮宗(法華宗)	日蓮(安房)	立正安国論	久遠寺(山梨)
坐禅	臨済宗	栄西(備中)	興禅護国論	建仁寺(京都)
	曹洞宗	道元(京都)	正法眼蔵	永平寺(福井)

2 鎌倉新仏教　＊死の直前に焼き捨てたため，一遍の著書は残っていない。

補足　本文に掲載された事項について，その内容をさらに深く理解するための解説として設けた。

補足　**自然法と自然権**　社会契約説は自然状態を想定するが，その背景には自然法思想の伝統がある。**自然法**とは，自然の内に存在し，すべての人が従うべき普遍的・基本的な法であり，人間が実際に定め，特定の地域に適用される**人定法**(**実定法**)とは区別される。

古代のストア派では，世界には宇宙を支配しているロゴス(理法・理性)があり，人間はそれに従って生きるべきだと説かれた。(→p.35) 中世のキリスト教神学では，(→p.23) 神の定めた永遠の法のうち，人間理性によってとらえられたものが自然法であった。

近代になると，自然法は神の意志に基づくというよりは，人間の本性(human nature)から導き出されるものとなる。**グロティウス**(H. Grotius 1583～1645)は『戦争と平和の法』(1625年)において，仮に神が存在しないとしても，自然法は存在するだろうといっている。さらに**ホッブズ**は，まず人間の自然権を想定し，自然法は自然権をよりよく実現するための人間理性の計算に基づくものとした。近代になると自然法は神の手を離れて世俗化されるとともに，その命令は「人間の権利の実現」を求めるものとなったのである。

参考　本文よりやや高度な内容ではあるが，倫理を理解する上での参考になるため，とりあげている事項を示す。

参考　**神話が語る天皇の由来**　高天原を追われたスサノヲの命は，葦原中国に下り，出雲国の人々を苦しめていた八俣の大蛇(祟り神)を退治し，葦原中国の統治者となった。その後，スサノヲの命の子孫であるオホクニヌシの命は，アマテラス大神に国を譲り，アマテラス大神の孫ニニギの命が新たな王として地上に下る(**天孫降臨**)。ニニギの命から4代目が，第1代天皇である神武天皇となる。

（2）授業の展開を容易にし，かつ目的意識を持って学習できるように，各項目には，その項目の主要テーマについての「問いかけ」を設け，かつその「問いかけ」を「本文」の直前に入れることで，意味あるものにしようと意図した。

文明開化　文明開化によって何がもたらされたのか。

江戸幕府を倒して発足した明治政府は，欧米諸国と対等な国家になるために，富国強兵（ふこくきょうへい）を柱（1868年）として，西洋近代の技術や社会制度・生活様式を率先（そっせん）して取り入れた。このような近代化の風潮（ふうちょう）を**文明開化**という。

（3）現代に生きる自己と現代の倫理的諸課題，そしてその考察の手掛かりとなる先哲の基本的な考え方を個別的に説明するだけでなく，各所に参照ページを付して相互に有機的に学習できるようにした。

デンマークの**キルケゴール**（S. Kierkegaard 1813～55）は，市民社会の進歩にともなって，人間が個性を失い，平均的で画一的な大衆になりつつあることを，早くも19世紀半ばに鋭く察知していた。彼によれば，全てを絶対精神の自己展開によって説明するヘーゲルの弁証法（→p.94）は，そのような状況を追認するものでしかなかった。どれほど完全な客観的真理を探し出したとしても，今ここで一回限りの人生を生きるこの私がそこから抜け落ちていては，何の意味もない。

（4）第 2 編～第 4 編の編末には，その編で扱った主な思想家の著作やことば／思想を一覧できるよう，見開きで「まとめ」を掲載した。

西洋近現代思想のまとめ

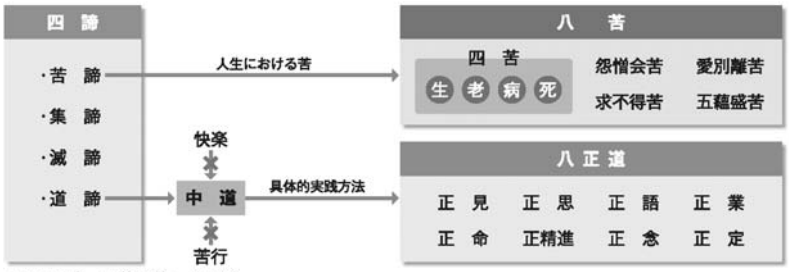
	思想家	生没年	主な著作	ことば／思想
ルネサンス・ヒューマニズム	ピコ=デラ=ミランドラ	1463-1494	『人間の尊厳について』	自由意志による自己決定に人間の尊厳を見出す
	エラスムス	1466-1536	『愚神礼讃』	カトリック教会を批判 自由意志を強調してルターと論争
	マキァヴェリ	1469-1527	『君主論』	宗教や道徳から独立した政治 権謀術数を肯定
	トマス=モア	1478-1535	『ユートピア』	囲い込み運動を批判　「羊が人を食う」
宗教改革	ルター	1483-1546	『95箇条の論題』 『キリスト者の自由』	ドイツで宗教改革　信仰義認説　聖書中心主義　万人司祭説　聖書のドイツ語訳
	カルヴァン	1509-1564	『キリスト教綱要』	徹底した予定説　職業召命観
モラリスト	モンテーニュ	1533-1592	『エセー』	「私は何を知っているか（クセ=ジュ）」 偏見・傲慢・宗教的不寛容を戒める
	パスカル	1623-1662	『パンセ』	「人間は考える葦」　弱さや悲惨さを自覚するところに人間の尊厳をみとめる
近代科学	ベーコン	1561-1626	『ノヴム=オルガヌム』 『ニュー=アトランティス』	経験論の祖　帰納法　「知は力」　イドラ
	デカルト	1596-1650	『方法序説』『省察』	合理論の祖　演繹法　方法的懐疑 「我思う，ゆえに我あり」
社会契約	ホッブズ	1588-1679	『リヴァイアサン』	「万人の万人に対する戦い」 国家権力に各人の権利を委譲
	ロック	1632-1704	『統治二論』 『人間悟性論』	所有権の不可侵　制限権を政府に信託 抵抗権を肯定　魂の白紙説
	ルソー	1712-1778	『人間不平等起源論』 『社会契約論』『エミール』	私有財産制による不平等の出現 一般意志に基づく直接民主制
ドイツ観念論	カント	1724-1804	『純粋理性批判』『実践理性批判』『道徳形而上学原論』『永久平和のために』	ドイツ観念論　批判哲学　理性の働きと限界　道徳法則　人格主義　目的の王国
	ヘーゲル	1770-1831	『精神現象学』	弁証法　世界精神　人倫
功利主義	アダム=スミス	1723-1790	『諸国民の富』	「見えざる手」　私益の追求による公益の増大
	ベンサム	1748-1832	『道徳および立法の諸原理序説』	功利主義　快楽計算 「最大多数の最大幸福」
	J.S.ミル	1806-1873	『自由論』『功利主義』	質的功利主義　他者危害の原則
実証主義と進化論	コント	1798-1857	『実証哲学講義』	実証主義　社会学を創始　神学的段階・形而上学的段階・実証的段階
	ダーウィン	1809-1882	『種の起源』	進化論　自然選択　適者生存
	スペンサー	1820-1903	『総合哲学体系』	社会進化論
プラグマティズム	パース	1839-1914		プラグマティズムを提唱
	ジェームズ	1842-1910	『プラグマティズム』	実用主義　有用なものが真理
	デューイ	1859-1952	『民主主義と教育』 『学校と社会』	道具主義　創造的知性　問題解決学習
社会主義	マルクス	1818-1883	『資本論』 『共産党宣言』（共著）	科学的社会主義　類的存在　唯物史観 階級闘争　社会主義革命の必然性
	エンゲルス	1820-1895	『空想から科学へ』	マルクスの盟友

132　第3編　現代に生きる人間の倫理

思想家	生没年	主な著作	ことば／思想	
キルケゴール	1813-1855	『死に至る病』	主体的真理の探求　実存の三段階　単独者	現代思想の幕開け
ニーチェ	1844-1900	『ツァラトゥストラかく語りき』	ニヒリズムの原因としてキリスト教を批判　「神は死んだ」　力への意志　超人	
ベルクソン	1859-1941	『創造的進化』	生の哲学　生の躍動	
ヤスパース	1883-1969	『哲学』『理性と実存』	限界状況　包越者　実存的交わり	実存主義
ハイデッガー	1889-1976	『存在と時間』	現存在　世界内存在　「ひと」　死に向かう存在	
サルトル	1905-1980	『存在と無』『嘔吐』	「実存は本質に先立つ」　「自由の刑」 対自存在　アンガジュマン（社会参加）	
フロイト	1856-1939	『夢判断』『精神分析入門』	無意識　エス・自我・超自我　防衛機制	精神分析
ユング	1875-1961	『心理学と錬金術』	集合的無意識　元型	
ソシュール	1857-1913	『一般言語学講義』	構造言語学の創始者	構造主義
レヴィ=ストロース	1908-2009	『悲しき熱帯』『野生の思考』	構造主義　文化相対主義	
フーコー	1926-1984	『狂気の歴史』 『言葉と物』	近代以降の社会は非理性的なものを狂気として排除　権力の働き	ポスト構造主義
デリダ	1930-2004	『エクリチュールと差異』	脱構築	
ドゥルーズ	1925-1995	『アンチ=オイディプス』	欲望機械　器官なき身体	
リオタール	1924-1998	『ポストモダンの条件』	哲学分野でポストモダンを提唱	
ホルクハイマー	1895-1973	『啓蒙の弁証法』	批判理論　道具的理性を批判	フランクフルト学派
アドルノ	1903-1969		ファシズムを生む権威主義的パーソナリティを指摘	
フロム	1900-1980	『自由からの逃走』	ファシズムを生む権威主義的パーソナリティを指摘	
ハーバーマス	1929-	『公共性の構造転換』 『コミュニケーション行為の理論』	対話的理性によるコミュニケーション的合理性	
ウィトゲンシュタイン	1889-1951	『論理哲学論考』 『哲学探究』	「語りえないことについては沈黙しなければならない」　言語分析	哲学分析
ポパー	1902-1994	『開かれた社会とその敵』	科学とは反証可能性を持つこと	哲学科学
クーン	1922-1996	『科学革命の構造』	科学の革命はパラダイムの転換による	
レヴィナス	1906-1995	『時間と他者』 『全体性と無限』	西洋哲学の全体性を批判　「他者」 「顔」からの再考	戦後の思想
アーレント	1906-1975	『全体主義の起源』 『人間の条件』	労働・仕事・活動 公共性の視点から全体主義を批判	
ウェーバー	1864-1920	『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』『職業としての政治』	カルヴァン主義と資本主義の相関を指摘 官僚制	現代社会の分析
リースマン	1909-2002	『孤独な群衆』	現代人は他人指向型性格が多い	
ロールズ	1921-2002	『正義論』	リベラリズム　公正としての正義	政治哲学
セン	1933-	『不平等の経済学』	厚生経済学　潜在能力アプローチ	
ノージック	1938-2002	『アナーキー・国家・ユートピア』	リバタリアニズム　権原理論　最小国家	
サンデル	1953-	『リベラリズムと正義の限界』	コミュニタリアニズム　共通善	

西洋近代思想のまとめ　133

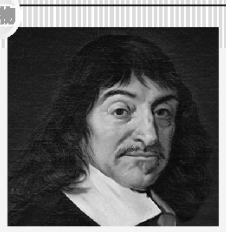
（5）多色刷りを効果的に利用し，工夫された図表，イラストや写真などを盛り込むことにより，複雑な内容を容易に理解・把握できるようにした。また人物の紹介や原典資料を豊富に掲載し，生徒が興味を持って学習できるようにした。



▲2 四諦・四苦八苦・八正道

人物

デカルト



フランスの法服貴族の家に生まれる。若いころヨーロッパ各地を遍歴した。33歳のときオランダに移り，思索に没頭する。53歳のときスウェーデン女王クリスティーナに招かれてストックホルムに移る。しかし，女王に対する早朝講義が病弱な身体に無理を強いたのか，翌年，９日間の病臥ののち死去した。主著『方法序(叙)説』『省察』『情念論』

原典資料　**我思う，ゆえに我あり**　　デカルト『方法序説』

しかしそのすぐ後で，次のことに気がついた。すなわち，このようにすべてを偽と考えようとする間も，そう考えているこの私は必然的に何ものかでなければならない，と。そして「私は考える，ゆえに私は存在する〔我思う，ゆえに我あり〕」というこの真理は，懐疑論者たちのどんな途方もない想定といえども揺るがしえないほど堅固で確実なのを認め，この真理を，求めていた哲学の第一原理として，ためらうことなく受け入れられる，と判断した。

２．対照表

図書の構成・内容	学習指導要領の内容	該当箇所	配当時数
第1編　現代に生きる自己の課題	(1)　現代に生きる自己の課題	5～20ページ	6
第2編　人間としての自覚	(2)　人間としての在り方生き方 ア　人間としての自覚	21～70ページ	17
第3編　現代に生きる人間の倫理	(3)　現代と倫理 ア　現代に生きる人間の倫理	71～134ページ	21
第4編　国際社会に生きる日本人としての自覚	(2)　人間としての在り方生き方 イ　国際社会に生きる日本人としての自覚	135～188ページ	18
第5編　現代の諸課題と倫理	(3)　現代と倫理 イ　現代の諸課題と倫理	189～220ページ	8
		計	70